

# 富士の民話 あれこれ

## 照天姫の かがみ石



原田妙善寺の西、特別養護老人ホーム鑑石園の庭の中に、今もなおわき続けている池。この池には、遠く室町時代にまつわる恋物語が伝えられています。今回は、この室町時代の恋物語について、鑑石園の庭を大切に管理している鑑石園事務長、首藤京子さんに話っていたいただきました。

常陸国(今の茨城県のあたり)小栗城主判官満重は、応永三十年(一四二四年)関東管領足利持氏の大军に城を囲まれました。落城のとき、わずかな家来を連れて城を逃れた満重は途中相模国(今の駿東郡小山町)の豪族横山大膳のところへ一時身を寄せました。ある晩、大膳の策略によって家来を毒殺され、満重もまた危機を迎えました。しかし、大膳のやかたにいた照天姫に助けられ、名馬「鬼鹿毛」に乗って照天姫とともに逃げる事ができました。そのころ、原田の妙善寺に大空禪師という徳の高い僧がいました。息も絶え絶えの満重と照天姫は、この妙善寺に身を寄せ、禪師の手厚い看護に一命を取りとめることができました。絶世の美人照天姫は、この妙善寺に隠れている間、清らかなわき水の中にある石に姿を映して、身なりを整えたということです。やがて満重は小栗城を再興し、照天姫とむつまじく暮らしました。

鑑石園の庭にあるわき水の池の中に、黒くて丸い石があります。これが水鏡になつていたんですね。市内の小中学生や老人クラブの人だけでなく、市外や県外からの見学者も訪れます。昔は、わき水が池に流れ込む音がうるさいほどでしたが、最近の水の量が減ってきています。特にことしの夏は水位が低くなってしまつて、とうとう「かがみ石」が水面から顔を出してしまつたんですよ。



首藤京子さん(鑑石園)

### こちら編集室

「いやあ、ことしの夏は暑かった。ビールやエアコンもかなり売れたらしいねえ」などと言っているうちに涼しい風が吹き始め、気がつくと周りにはもう秋。私が四季の中で最も好きで、最も怖い季節です。それはなぜかって? 「食欲の秋」だからですよ。サンマの塩焼き、マツタケの土瓶蒸し、クリやカキ、などなど。数えきれない海や山の幸がおいしそうな香りを漂わせ、私を襲う。助けてー。(実は、マツタケの土瓶蒸しって1、2回しか食べたことのない私)

本号9ページに掲載の「市民ミュージカル・ディアナ号」の制作発表会では、数々の苦労と地方の市民文化を全国に発信する意気込みがひしひしと感じられました。ところで、このミュージカルに背が高く、最も体重があり、2番目?にハンサムなE君が出演します。重い体の割に動きは意外と軽やか。カラオケでの歌声もなかなか。ハードな練習に耐え、スリムな体に変身するであろう彼の舞台での雄姿が楽しみです。

広報ふじは環境に優しい再生紙を使っています